

全学クラス討論集会

和泉

クラ闘結成—広範に決起す

まる「〇日」学費値上げ阻止全学クラス討論集会は、和泉校舎

で一時より12・10集会実行委主催により開催された。本紙ですてに報道されてる通りに大学当局の学費値上げ強行策動への怒りは、三〇〇名もの圧倒的な学友の結集となり四〇七番教室に巨大な討論の渦を巻き起こした。

「学費値上げ」という突き上げは、クラスをまたサークルを、その末端から揺り動かし、文・法・政・経営などのクラス単位に続々とハロ闘委は結成されている。このような学内の流動化状況をより広範に巻き起こし、極めて根底的かつ永続的ハロ闘の視座を学費値上げ阻止のハロ闘に与えるものとして本集会はあるだろう。

「この本集会実行委の宣言で討論集会は開始されていった。学費値上げ阻止に向けた諸々のクラスの視点は、基調を提起する法・文・政経の学友より展開されそこに生じた疑問、反発、深化といった相互討論を経る中に、個々人が内包する学費値上げの意味するもののイメージの共有化は確実に進んでいった。

赤字財政を学費値上げで乗り切るとうとする（一方的な学生への責任転嫁という発想）なら経理公開を、また国庫補助の増大をといった要求闘争ではならん本義を捉え切れない。もともと資本主義社会である限り、教育は資本に隷属されるという「教育の社会化」の視点へと討論は深まった。

大学が現行教育体系の一環としてあり、その進む方向性を示唆する中教審路線。それが肯定される社会状況のもとで善甲されることを捉えるならば、「教育の帝国主義的再編」「資本に隷属された労働力商品（＝学生）造り」等々と

説かれる内容性を、現実的・具体的に日々繰り返される授業の中に、またそれを包括するカリキュラムに醒めた眼を向けに行くことが握らされていった。そこで頭わになる既成学問体系の空洞化を解体する過程こそが、実質的な中教審路線化阻止のハロ闘であることが確認されていった。

さらには、このハロ闘の旗をもった主体（＝学友）に潜む内的矛盾を展開するには具体的矛盾を止揚する闘争を闘い抜く中にしか展開しえない。階級意識意識の主体形成をやり抜く闘いの一環とすべく「学費値上げ阻止闘争」があることを捉えつつ集会を終え、すぐさま学内アモを展開した。

久し見られたなかつた学内における大衆運動の昂揚は今まさに燃えたんとしている。本集会はその先制攻撃の構架になるだろうといかにして矛盾に対する闘いを全クラス学友に定着化してゆへのか。そして日常性の不断の解体へと発展する必要があるだろう。